

三重大学人文学部外部評価

2007年11月28日実施

外部評価員 赤間 道夫 (愛媛大学法文学部副学部長)

はじめに

この度、三重大学人文学部の外部評価委員を仰せつかり、教育・学生支援について詳らかに検証する機会をいただきました。三重大学人文学部のみなさんが教育・学生支援に並々ならぬ努力を払われていることを知るとともに愛媛大学における教育・学生支援のあり方を再考する絶好の機会になりました。あらためてお礼申し上げます。

以下では、当日のご説明や質疑応答を含め、「評価すべき事項」と「さらに発展・検証を必要とする事項」に分け、それぞれいくつかのポイントに絞ってまとめてみました。

1) 人文学部概要関連事項

・「評価すべき事項」

大学理念、教育に関する目標、学部理念、学科理念、研究科理念、専攻理念とすべての領域にわたって明文化されており、評価できる場所です。また、各種パンフレットにおいては「このような人を求めます」というアドミッション・ポリシーも明確です。

・「さらに発展・検証を必要とする事項」

明文化された理念が、実際のカリキュラムにどのように反映されているかをさらに発展させる必要があります。アドミッション・ポリシーで明確にした学生を三重大学人文学部ではどう育てるという具体的なプランです。さらに進んでアドミッション・ポリシーからカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーなどと理念を具体化するプロセスを示すことが求められているように思います。

これに関連して、現在実施している帰国子女と社会人のための特別選抜（ただし応募者が少ないようですが）を、総合学科系高校からの推薦あるいはAO入試などに変えることによってこの特別選抜を拡充する方策の検討もされてしかるべきです。18歳人口が減少するなかで、私立大学の入学者のうち半数以上が一般選抜試験によらない入学者であるという現実からではなく、アドミッション・ポリシーに相応しい入学者を確保するという積極的な入試戦略も検討するに値すると思います。

2) カリキュラム関係事項

・「評価すべき事項」

共通教育のPBL教育、コミュニケーションを重視した英語教育は着実に実施されていました。専門教育の専修と地域との融合（文化学科）、履修プログラム（社会科学科）は、両学科の特徴を活かしたカリキュラムと言えます。同時に、オリエンテーションセミナーから卒業研究にいたるきめ細かいカリキュラムになっていることも評価できます。定例研修会を実施しているFD活動は教育の質の向上と改善のためには不可欠であり、教育活動に明確に位置づけられていました。

・「さらに発展・検証を必要とする事項」

専門教育でPBL教育といえば演習科目と卒業研究とっていいと考えていますが、共通教育でのPBL教育と専門教育との関連がさらに有機的であることが明確になるように位置づける必要があるのではないのでしょうか。

同様にTOEICおよびeラーニングシステムが専門教育の場でどのように活かされているのかの検証が

示されますと、共通教育と専門教育とが繋がります。

今回は、第2（未習）外国語についてお聞きする時間がありませんでした。この科目の履修は、専門領域では人文学部（とくに文化学科）がもっとも関係が深いだけに、カリキュラムの特徴として打ち出せるのではないのでしょうか。

カリキュラムの充実には、当日の意見として申しあげたように、キャップ制の導入と成績評価の学部統一も課題です。前者は、4年間を一貫とした教育体系のもとで、単位制の実質化をはかるうえでは避けて通れません。後者も、成績評価が担当教員毎でばらつきがあると、社会の要請に応えるものではないと思われまます。

3)生活支援・就職支援関連事項

・「評価すべき事項」

「なんでも相談室分室」による生活支援と就職支援活動は特筆すべきものでした。学部として「手引き」を発行し、ガイダンスやセミナーの実施も高く評価できます。

・「さらに発展・検証を必要とする事項」

生活支援については、ゼミ所属との関係が見えませんでした。全員がゼミに所属していると思われまますが、そこにおける指導を通じた生活支援も生活支援になっているはずでず。アカハラやパワハラの問題を認識しながらどう指導するかという教員のレベルアップも同時に期待されています。教員の指導力向上の方策の有無が明確ではありませんでした。

全学の学生による学生相談窓口との連携による、学生支援の内容を共有する必要があります。現在各大学においては、学業不振者だけでなく、心の悩みを抱える学生が多く見られます。専門カウンセラーの配置をはじめ、大学が一体となった取組が求められているといっても過言ではないからでず。

インターンシップについては詳しくお聞きすることができませんでした。学生定員からすると参加者が多いといえないと思われまます。就職支援の到達点をふまえたインターンシップの充実を考慮してしかるべきでず。

4)高大・地域連携関連事項

・「評価すべき事項」

出前授業、説明会、高校進路指導担当者訪問、サマーセミナー、公開ゼミ、さらには「三重の文化と社会」プロジェクトは人文学部として熱心に取り組んでいることのあらわれであり、高く評価できます。出前授業についてはアンケートを実施し、フィードバックを考慮しており、大変参考になりました。

・「さらに発展・検証を必要とする事項」

全学で強化すべきことと学部独自の課題との切り分け・整理が必要な時期ではないのでしょうか。人文学部として全学の取り組みの先頭を切り、全学の底上げをはかる意味がありますが、三重大学として高大・地域連携をどのように位置づけていかに集中することも必要でず。換言すれば、総合大学の良さを発揮しつつ学部の独自性を主張できるような取り組みであることが望ましいということになります。

三重大学の教育にかかわるセンターには、「高等教育創造開発センター」「共通教育センター」「国際交流センター」があります。生活支援、就職支援、高大連携について専門教員あるいは職員を配置したセンター的組織（委員会ではなく）も視野に入れる必要があるかもしれまます。

【補足1】教員研究室の表示について

施設をご案内していただいたときに、教員の研究室表示に2種類あることに気がつきました。「〇〇研究室」と「〇〇教官室」の表示です。「教官」の呼称は国立大学法人化以降においては正確ではない表示と思われます。

【補足2】入試関係データについて

全学パンフ『三重大学案内』に「平成19年度一般選抜志願者・入学者」および「平成19年度特別選抜等志願者・入学者」のデータが公表されています(51ページ)。公表項目については「募集人員」・「志願者」・「倍率」・「入学者」だけでなく、「受験者」と「合格者」あるいは「追加合格者」などすべてのデータを公表すべきです。また、当該年度の直近のデータだけでなく、過去3年間あるいは過去5年間なども公表すべきです。私立大学のほとんどが全データを公表していない現状にあって、国立大学の優位性は入試情報の開示にもあると考えます。ちなみに、愛媛大学ではすべての入試データを過去5年間にさかのぼって掲載しています。中四国の大学では広島大学(ホームページ上では過去7年間)と山口大学が同じように公表(掲載)しています。

【補足3】大学HPとGPの位置づけについて

本文で触れたことに関わって、文科省の教育の競争的資金であるGPについて一言付け加えます。教育力をどの指標に求めるかについては種々議論あるところですが、週刊誌等ではすでにGPをひとつの目安にしています。しかし、同時に、「ビトウィーン編集部が04年に実施した調査では、特色GPに選ばれた大学を知っている高校生は、わずか2割だった」(『読売ウィークリー』2006.12.3)とのことで、GPの広報の必要性が急務といえます。三重大学は06年まで特色および現代の2分野で4件採択されているものの、三重大学HPおよび全学ガイドブックを拝見したかぎりでは、この実績が前面に押し出されていないように思います。(大学としての取組ではなく、関係部局の取組という印象が強くなっています。)

下記に、三重大学(図1)、静岡大学(図2)、名古屋大学(図3)、広島大学(図4)および愛媛大学(図5)のHPのトップページを掲げています。各大学ともバナーや目立つ工夫をすることで、GP(およびCOE)を重点項目のひとつとしてアピールしていることがよくわかります。

図1 三重大学 HP (「教育活動」からワンクリックしないと GP にたどり着けない)



図2 静岡大学 HP



図3 名古屋大学 HP



図4 広島大学



図5 愛媛大学 HP

